

障がい者の就労をサポートする 広報と商品開発


1 目的・概要

私たちのプロジェクトは、「障がい者が生き生きと働ける社会」の実現を目指し、広報と商品開発の二つの側面から障がい者就労における課題にアプローチしました。まず、A型・B型障がい者就労支援施設様や京都府立京都障害者高等技術専門学校様へ訪問させていただき障がい者就労における課題の把握を行いました。そこで、①就労における工賃が低いこと、②作業の意義を感じにくいこと、③特に「知的障がい」「精神障がい」の方の就労が困難であること、等の課題を現場の声として



いただきました。これらの課題に対して、広報では、実際に働く障がい者の就労に対する思いや障がい者就労の現実について理解を促進するために、ラジオの収録と放送・配信を行いました。「京都三条ラジオカフェ」様協力のもと、ラジオを通して履修生1名とA型就労支援施設の利用者1名の生の声で発信しました。また、商品開発では、障がい者の方に就労の意義を感じていただくために、障がい者就労支援施設で制作していただける商品の開発を行いました。元々施設で取り扱われていた「藤袴」を軸として、既存商品の「入浴用藤袴」の改良と新商品の藤袴を中に入れた折り鶴「香折り鶴（かおりづる）」の開発を行い、藤袴祭にて販売をしました。

Annual Schedule

2023年	4月	役割決め、障がい者就労についての学習	
	5月	障がい者就労関連施設視察	
	6月	企業訪問、商品開発についての話し合い	
	7月	専門家の方への聞き取り、試作品作成	
	9月	藤袴祭りへ向けた準備	
	10月	藤袴祭り出店、障がいを持った方へインタビュー	
	11月	ラジオ番組企画、収録	
	12月	開発商品フィードバックの為に旅館訪問、障がい者受入企業へインタビュー	
2024年	1月	活動まとめ	

2 成果達成度



私たちは、「障がい者が生き生きと働ける社会」の実現のために、①就労における工賃が低いこと、②作業の意義を感じにくいこと、③特に「知的障がい」「精神障がい」の方の就労が困難であることの3点を課題に設定しプロジェクトに取り組みました。まず、①就労における工賃が低いことについては、商品開発において商品にいかにか付加価値をつけることができるかという点からアプローチしました。A型就労支援施設にて既に受注制作されていた「入浴用藤袴」の包み方や分量を見直す

ことと、新商品の「香折り鶴（かおりづる）」とのセット販売にすることで、販売価格を上げて、工賃として制作してくださった障がい者の方に還元できるよう取り組みました。今回は納入期間の短さから障がい者の方の作業が実現することはなかったですが、試しに藤袴祭にて販売をすると、制作した約30セットが数時間で完売、また、さらに追加で生産のご依頼もいただきました。購入者の方からのフィードバックでは、香りの薄さやパッケージ等改善の余地はまだまだあるものの、嬉しい反響をいただき、セット販売や改良による付加価値を感じていただけたと実感しました。今後、価格調整や改善を加えれば障がい者の方の工賃への還元を増やすことができると希望の光が差しました。次に、②作業の意義を感じにくいことについては、商品開発において、制作過程の単純化と制作した商品が売られているところを目にすることでモチベーションを高めていただくことができると考えました。作業工程で、障がい者の方が取り扱いやすいというスティックのりを使用したり、糊を塗る範囲が分かりやすいような枠を作成したりするなど工夫しました。また、源氏藤袴会様ご協力の元、京都固有種のフジバカマを使用した商品にすることで、京都のお土産品として手に取っていただけるものにし、作業をしていただいた方に自分の関わった商品が誰かのもとに届いているという実感を持って就労できるように考えました。今回は藤袴祭のみでの販売でしたが、障がい者の方が就労されている旅館での販売もしていただけるということで、より作業の意義を感じていただけることにつながると期待しています。また、今回の活動で得た成果から、障がい者の方が企画をしたり趣味を反映させたりして、施設オリジナルの商品を売り出していく可能性も見出しました。最後に、③特に「知的障がい」「精神障がい」の方の就労が困難であることについては、広報において、当事者の生の声を発信するという形で正しい理解を促そうと努めました。春学期に集めた「障がいについての基礎知識すら浸透しておらず、理解されにくい」「障がいを持っていてもサポートと環境があれば普通か普通以上に働ける」といった現場の声から、障がい者就労に対する正しい認識や障がいを持った方が生



き生きと働いている様子が十分に伝わっていないと感じ、心配される場所もありましたが、打ち合わせを重ね、履修生と当事者の対談を発信しました。プロジェクト科目の1年間で取り組めることは限られてはいましたが、たとえ小さな範囲だとしても、「障がい者がき生きと働ける社会」の実現に向けて、寄与できたのではないかと考えます。

3 プロジェクトを通じて

春学期初頭は、障がいに対する知識もほとんどない多くの皆さんと同じ状態でした。しかし、この1年間障がい者就労の課題に向き合い、障がい者への見方も変わりました。この課題を私たちの力だけで解決することは難しいことも実感し、社会全体で取り組む必要があると強く思いました。1年間、うまくいくことばかりではありませんでしたが、発生した困難を乗り越える力をつけることができたと思います。また、本プロジェクトに



協力してくださった皆様を含め、いろいろな方々との大切な出会いがありました。普段の授業ではできない非常に有意義な経験ができ、多くのことを学ばせていただきました。



編集後記

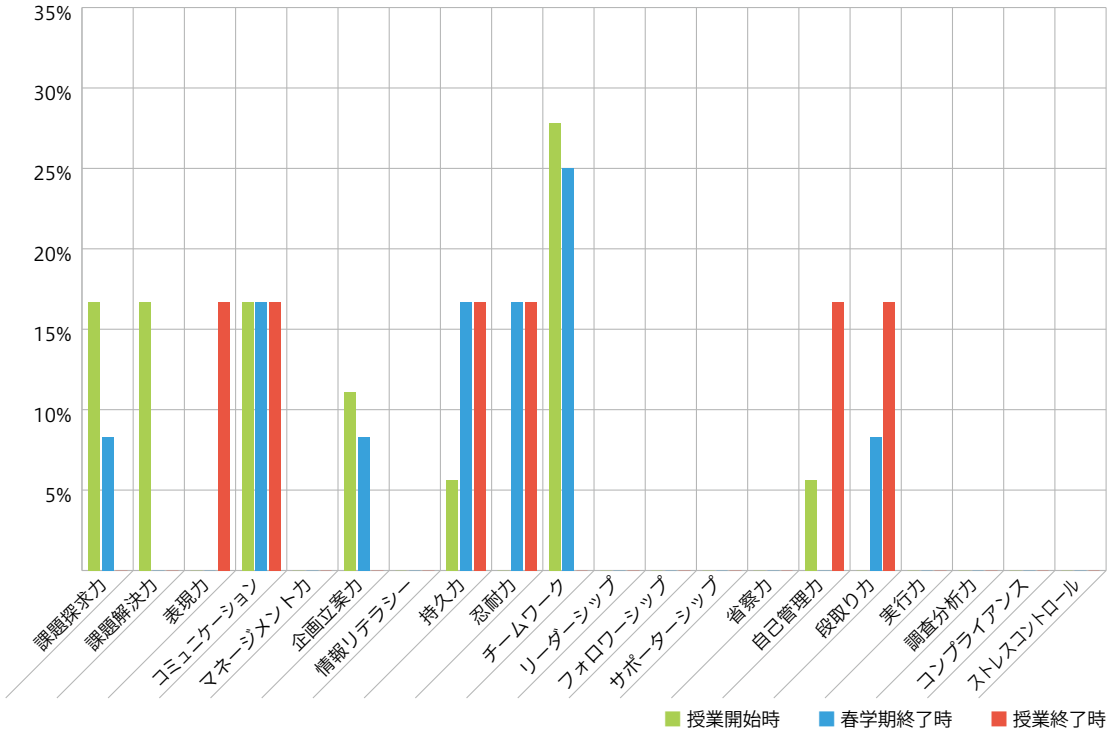
この1年を振り返ってみて、途中でメンバーがプロジェクトから抜けたり、当初予定していた企画が実行不可能になったりと、プロジェクトを進めていく上での課題も多かったです。しかし、予定していた企画を考案し直し、人数が減った分のタスクを振り分け直していく中で、臨機応変に物事に対応していく能力を養うことができたと感じました。また、このようなたくさんの課題がある中で、プロジェクトを1年間遂行できたのは、プロジェクトにたくさんの方々に協力していただいたおかげです。改めて、『障がい者の就労をサポートする広報と商品開発』に関わってくださった、障がい者就労に携わる方々や京都の企業みなさんに感謝したいです。

プロジェクトメンバー

東 小梅(文3) 田巻 柚(文3) 奥村 沙耶(政策4) 前川 航輝(文化情報4)

プロジェクト活動 アンケート集計結果

Q1. チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んでください。



Q2. プロジェクト活動を通じて実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んでください。

